一般社団法人
全国高等学校PTA連合会 会報
No 85
一般社団法人全国高等学校PTA連合会
（連絡先）〒101−0025 東京都千代田区神田佐久間町2−1（奥田ビル）TEL03−5835−5711 FAX03−5835−5757
発行人 佐野元彦　URL http://www.zenkoupren.org/　e メール info@zenkoupren.org

熊本城現在

～熊本地震被災地の高校ルポ～

昨年の４月14日、16日に発生した、平成28年熊本地震で被災された熊本県の高校の復興状況を全国のＰＴＡ会員の皆さんに報告する為に、２月24日に佐野会長、木戸専務理事、内田常務理事と熊本県の被災地視察に行って来ました。この視察で特に大きな被害を受けられた、県立御船高校、県立第二高校、県立熊本高校の３校を訪れました。

御船高校は震源に一番近い高校でした。その為に自宅が被災した生徒が多く、自分の住んでいる家が倒壊し、長い間避難を強いられて、心にも大きな傷を負われているとのことでした。先生方より、生徒の話しを聞かせて頂いた時には、大変に胸に迫る思いをいたしました。地震発生から一年が経とうとしている今も苦しんでいる生徒さんがいることに、地震の凄まじさと地震の恐怖を思い知りました。

第二高校では、震災当初は門柱も倒れ、校舎も８教室が使えない状況、校舎と校舎を繋ぐ渡り廊下が壊れて使えない状況で、いまだに仮設校舎での生活でした。28年度中に元の状態に戻る事は出来ないとのことでした。その状況において、生徒、先生共に協力をして学校を盛り

今号の主な内容

～被災地ルポ～　熊本県訪問　１～３頁
～羽ばたけ双葉の生徒たち～　４頁
～都道府県県高Ｐ連事業活動紹介～
「高校生と語るつどい」　４頁
「地域力と生徒力を取り入れたＰＴＡ交流活動」　５頁
「愛の巡回活動」　５～６頁
文部科学大臣補佐官　鈴木　寛　氏
講演「ＰＴＡに期待すること
～家庭教育・地域の教育力を高めるために～」　７～13頁
子どもの貧困に向き合う　14頁
賠償責任補償制度のお知らせ　15頁
第67回全国大会静岡大会のご案内　16頁

熊本高校視察

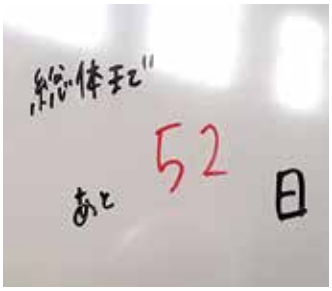
上げていく姿に心を打たれました。また、これは次に紹介する熊本高校も同様ですが、体育館が使えないので、卒業式、４月の入学式も、学校で執り行えない状況でした。母校で卒業式が執り行えない事に生徒、先生、保護者ともに大変残念に感じておられました。

熊本高校も第二高校と同様の状況でした。校舎の屋根裏に水道管などの配管が破壊されていて、雨漏りの様な跡が校舎のあちこちに見受けられました。また、特別教室が影響を受けており、これもすぐに元通りに戻れる状況ではありませんでした。体育館もすぐに使える状況ではなく、体育館ホールの中のホワイトボードに「総体まであと52日」と記された文字が悲しく、高校生を持つ親としてとてもやり切れない思いを感じました。最後に私が今回の視察に於いて、一番心を打たれた事を皆さんに紹介します。これは、大変に追い込まれた環境において、熊本高校の生徒会長が震災発生から11日経った日に、生徒に向けて送ったメッセージです。

すばらしいメッセージです。高校生の力強さと頼もしさを感じるものです。

全国の高校生に紹介したく掲載についてご尽力下さった、熊本高校の校長先生、ＰＴＡ会長に感謝を申し上げます。また、この視察において、熊本県公立高校ＰＴＡ連合会、御船高校、第二高校の皆様にも感謝を申し上げご報告と致します。

（調査広報委員長　川原慎一）



生徒会長より全校生徒へのメッセージ

今回の熊本地震で被災された皆様にこころからお見舞い申し上げます。

１人の被災者として僕からみんなに伝えたいことは２つ。

１つ目は何よりも自分の命を大切にしてほしいということです。僕らには家族がいます。友達がいます。先生がいます。なんといっても、夢があります。家族があり、先生に学び友達と語り合える学校があり、目標があるから努力できる。これまでの何ともなかった日常が、かけがえのないものであったことは皆さんが一番分かっているはずです。

そして、その日常の前提で「生きている」ということです。この災害で身体的にも精神的にも、きつい思いをしている人がたくさんいるはずです。しかし、生きている限り、僕らにできないことはありません。体を、命を、何よりも大切にしてください。どうか無理はしないで。時間がたてば、今までのかけがえのない日常に戻れます。それまで、まだまだ油断は禁物です。

２つ目は、この災害を自らの成長の糧にできる勇気を持ってほしいということです。今も避難所で暮らしている人もいるでしょう。（僕もです笑）地域ボランティアをしている人もいるでしょう。自分が被災したからこそ、感じられること、見えるものがたくさんあるはずです。その経験を、思いを忘れてはいけません。災害を生き延びた私たちの次なる責務は、その大きな犠牲を無駄にしないことです。そして、新たな犠牲を生み出さないよう努力することです。この地震がもたらした被害は、計り知れません。しかし、災害がもたらした経験を自分へ成長の糧にしてほしい。その勇気を持ってほしいと思います。

何よりも命を大切に、そして、この経験を自分の力に。僕の知る皆さんならこれができると信じています。

また、元気な皆さんと会えるのを心から楽しみにしています。

それまで、みんな　頑張ろう！

平成28年４月27日

熊本高校　生徒会長　亀　井　宏之介

熊本高校天井

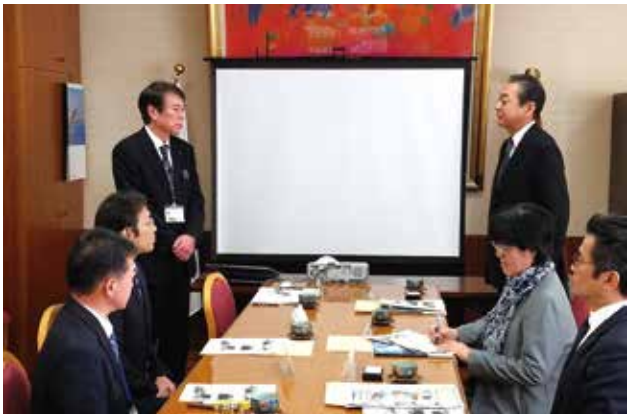
第二高校

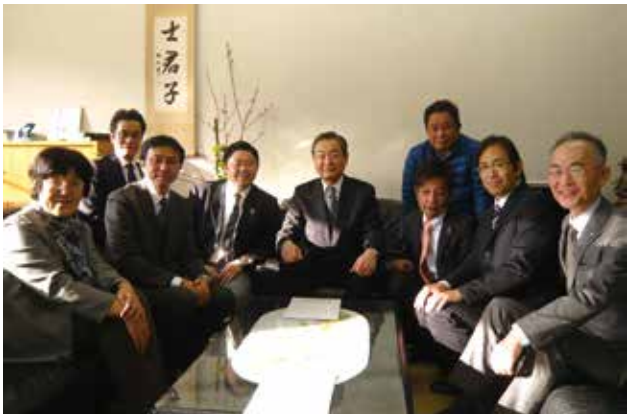
熊本高校プレハブ①

熊本高校プレハブ②

御船高校

第二高校


御船高校説明


熊本高校

羽ばたけ双葉の生徒たち

平成28年12月８日、福島県立双葉翔陽高校の皆さん（菅野利彦校長、第３学年生徒12名、教員７名）が義援金支援の御礼にと卒業を前に全国高等学校ＰＴＡ連合会事務局に来所されました。

「ＰＴＡの皆様のご支援のおかげで、様々な研修や学校行事などを行うことができ、貴重な経験をさせていただきました。支えていただいているという思いもとても心強く、励みになりました。ありがとうございました」と皆さんの寄せ書きをいただきました。また全国高Ｐ連への感謝状と大きな輝かしいダルマをいただきました。

双葉翔陽高校は原発事故の影響により平成29年３月末で休校となりました。生徒会長の山田勇樹さんをはじめ12名の３年生の皆さんの卒業を最後に後輩は入ってきません。

このダルマに目を入れるのは双葉翔陽高校の皆さんが夢を叶え、社会に羽ばたいたときです。これからも、全国高Ｐ連はずっと応援しています。

都道府県県高Ｐ連事業活動紹介

北海道高等学校ＰＴＡ連合会

～高校生と語るつどい～

当連合会は、北海道が単独で構成する地区連合会です。他の地区に比べ加盟学校数や生徒数は多くありませんが、面積が８３，４２４㎢で東北６県に新潟県を合わせた面積とほぼ等しいなど広域にわたるため、地区内を13の支部に分け近接地域内での支部活動を行う他、連合会としては毎年６月に開催する総会・大会、青少年の健全育成を目指した「高校生と語るつどい」などの主催事業を行っています。

「高校生と語るつどい」は、高校生が他校の生徒・保護者や教員との会話を通じてコミュニケーション能力や社会人としての資質向上を図ることを目的に実施しており、今年度はスマートフォンの問題を共通テーマに空知支部と根室支部の２支部を主管支部として開催しました。

空知支部では14校83名（うち生徒42名）が参加し一日日程で開催されました。講演「情報社会を生き抜く、ＩＣＴの積極的な生かし方」の後、それを踏まえて、ＩＣＴのメリットやデメリットについてグループ討議を行いました。年齢や立場が異なる人々による意見交換は、それぞれの考え方を理解するとともに、自分の考え方を見つめ直し、さらに深めていくことに繋がる有効な機会となりました。

また、空知支部は石狩川中流の豊かな農業地帯であり、近くには森も広がっています。その中から見つけた素材を活用して、木製のキーホルダー、フォトフレーム、さらには、それぞれが創意を凝らしたオブジェの製作も行われ、互いに講評し合う姿を見ることもできました。

根室支部では一泊二日日程で世界遺産知床半島の入口にある羅臼町を会場に開催されました。参加者数は７校82名（うち生徒33名）で、ネット社会の進展とその影響に関する講演や、スマートフォンを使用する際のマナーについてのグループ討議、さらにはグループごとの発表や意見交流が行われました。

また、羅臼町は北方領土の国後島を臨む位置にあります。地域の方から北方領土返還への思いを伺い、この問題についての意見交換も行いました。地域特産の昆布を出荷用に整える「ひれかり」体験も行いました。これらを通じて、地域の特色やふるさとの大切さを再認識することができました。初日の夕食後には、参加校の学校・地域紹介も行われ、和やかな雰囲気の中で参加者同士の交流が行われたこともよい思い出となりました。

「高校生と語るつどい」根室支部

今年は２支部で「高校生と語るつどい」を実施しましたが、高校生の健全育成はもとより、私たちＰＴＡにとっても、親子のふれあいの大切さや子育てに関して多くの示唆を得ることができた事業であったと同時に、故郷を新たな目で見つめ直す契機ともすることができました。

この事業については、既に来年度に向けて動き出しており、今後も検討を重ねながらより内容の豊かなものにしていきたいと考えています。

変化の著しい昨今の社会ですが、そのような中にあっても学校の主人公は、子どもたちです。私たち北海道高Ｐ連は、『すべては子どもたちのために』を合言葉に、高校生の健全な育成を図るための活動に取り組んで行きます。

「高校生と語るつどい」空知支部

秋田県立能代西高等学校ＰＴＡ

「地域力と生徒力を取り入れたＰＴＡ交流活動」

～ソバの栽培から　ソバ打ちそして試食～

○地域力

本校は世界遺産の白神山地の麓に位置し、白神ネギの一大産地に隣接し稲作やソバの栽培が盛んな地域である。ソバでは石川と鶴形の両地区が有名である。

○生徒力

本校は５つの系列を持つ総合学科の高校である。生物資源系列では平成十三年からソバを一ヘクタール以上栽培し、実験実習に取り入れている。また、一年生の教科「産業社会と人間」では、全員がソバ打ち体験ができるように計画が組まれている。さらに、農業クラブの生徒を中心に、ソバ打ちの研究と実践が行われ、技術力が向上している。

○経緯

平成十三年以降、本校ＰＴＡも農場解放や学校祭などでソバの花を観察したり、ソバ打ちを見学する機会はたくさんありました。平成二十一年に「地域力と生徒力を取り入れたＰＴＡ交流活動」という議題で役員会や総会で話し合いを持ち、校内行事へのＰＴＡ参加や、気軽に来校できる雰囲気作りを目的に取り組むことになりました。このことが能代地区交流会で話題となり、平成二十二年から地区のすべての高校から参加を得ることになりました。平成二十五年には、東北地区高Ｐ連〝山形大会〟でご縁のできた他地区の秋田明徳館高校ＰＴＡも加わり、継続した交流を続けています。

○交流活動

ソバを食べることは、種を蒔くことから始まります。当初は他校ＰＴＡの方に蒔かせることに不安もありましたが、初体験に感動したり、本校生徒の指導に感激してくれました。ソバ蒔き当日には、施設見学や園芸教室、生徒の商品開発したものの試食、栽培した花や野菜の販売も行われました。ソバの生育や農業全般まで話は尽きません。七月下旬に種を蒔き収穫までの期間は、多くの方が農場を訪れ成長を静かに見守ってくれました。十一月下旬、待ちに待ったソバ打ちです。本校ＯＢのソバ打ち名人を講師に、農業クラブ生徒が補助員として粉から打ち講習開始です。四人一組となり、ざるソバと温ソバの二種類を打ちます。薬味は、藤里地区の生山葵と白神ネギ、スープは比内地鶏、言うこと無し。自分で打ったソバは格別です。今年も、本校会場は超満員で大盛況でした。

○結び

このような取り組みは、地域力と生徒力をＰＴＡ活動に組み入れたことにより実現しました。これからも、学校・地域・ＰＴＡのあり方を考えながら、新たな展開を模索するきっかけにしたいと思います。

奈良県高等学校ＰＴＡ協議会

愛の巡回活動

会長　堀　裕明

１９６０年代から70年代初頭にかけて日本中を騒動の渦に巻き込んだ学生運動でしたが、それらの学生運動を誘発した社会の構造的問題や学生運動によって引き起こされた社会不安などが、次の時代に現れる青少年の非行問題や高等学校の「荒れ」の引き金となったことは疑う余地のないところです。暴走行為、校内暴力、喫煙、飲酒、シンナー吸引等々の問題が高校生の間に広がり、１９８０年代に至るまで次々に起こる事件や事象への対応に学校も家庭も振り回され混迷の度を増していったのです。

このような時代背景の中で、奈良県高等学校ＰＴＡ協議会は「青少年の非行を防止するためには、全ての家庭の理解と全ての保護者の愛情が不可欠である」との思いに至り、その具体的な取組として１９７６年に「奈良県高等学校ＰＴＡ協議会ＶＰＡ活動」を立ち上げることにいたしました。ＶＰＡ活動とはボランタリー・パトロール・アクティビティの頭文字を取ったもので、保護者の熱意と愛情によって高校生の校外活動を温かく見守っていく運動として、さらに保護者の自発的な巡回活動としてその第一歩を踏み出したのでした。

ＶＰＡ活動を始めた当初は、あくまで青少年の非行防止を第一義と捉えていた訳ですが、１９９０年代に入り高校生の非行問題が下火になっていくと、「高校生の健全育成を非行防止の視点だけで捉えるのではなく、もっとポジティブな視点で捉えよう」という機運が高まってきました。すなわち、高校生の規範意識や生活マナーの向上を目指そうという動きに方向転換し始めたのです。

そういった動きの中で、ＶＰＡ活動は県教育委員会や県警察本部の指

導援助に加えて、高等学校長協会や高等学校生徒指導研究協議会の組織的な理解や協力をいただけるようになり、その後「乗車マナー向上運動」と銘打って県内全ての単位ＰＴＡが一斉にターミナルや車内の巡回活動に取り組む現在のスタイルにシフトしてからは、ＪＲ西日本、近畿日本鉄道、奈良交通バスなど公共交通機関の全面的なバックアップを得るに至り、今日では保護者と先生に地域社会の関係機関や団体を加えた正に「学校・地域・家庭」の連携による高校生のマナーアップ活動を展開しているところです。

本年度の活動には学校行事等で参加できない単位ＰＴＡを除く58団体が参加しました。参加者の内訳は学校関係者が390人、ＰＴＡ関係者が321人、警察はじめ地域の協力者が27名の合計738名です。活動終了後には各単位ＰＴＡから取組の様子や感想を記した報告書が事務局に提出され、それらを集約した資料が会長会に提出され事業報告される運びとなっています。

近年の活動報告の内容を見ると、「高校生の乗車マナーが随分良くなっている」とか「挨拶してくれる高校生が増えた」などと好意的な評価が増えています。しかし、一方ではスマホやイヤホンの問題が数多く指摘されるようになってきました。「スマホに熱中するあまり本来あるべき友達同士の会話が希薄化しているのではないか」とか「ながらスマホによる衝突事故や転落事故の危険性が高まっているのではないか」など、殆どの単位ＰＴＡの報告書で問題が指摘されています。

ところで、我々が取り組んでいるＶＰＡ活動は「指導」という実を伴わないＰＴＡ活動のシンボルティックな取組なのかもしれません。しかし、年に一度の私たちの活動が先生方に指導のチャンスを与え、ターミナルや車内で腕章を付けた保護者の姿を見ることで高校生が自らの課題に気付き、自らの意志で課題を解決しようとしてくれることが最も望ましい姿ではないでしょうか。時代の流れとともにＶＰＡ活動の目指すところは変化していくでしょう。しかし、先達が思い至られた「保護者の愛情と自発的活動」の精神は奈良県高等学校ＰＴＡ協議会の活動指針として今後とも大切に継承していかなければならないと考えています。

ターミナル駅でのＶＰＡ活動

グローバル化時代を生きる高校生を応援します

高校生新聞® 高校生スポーツ®

グローバル化や情報化が急速に進展する中、高校生を取り巻く状況も大きく変化しています。これからの日本を担う高校生に、希望をもって生きる力と知恵を育んでほしい。高校生新聞はそんな思いから、学校生活、社会や世界の動き、進路や学問など、高校生に知ってほしい確かな情報をお届けします。

●1993年創刊　●毎月10日発行(8・2月休刊)　●タブロイド判/カラー/16~28ページ
●年間購読料2,160円(税・送料込)　定期購読のお申込みはホームページから

株式会社スクールパートナーズ
高校生新聞社
▼取材依頼は編集部まで
TEL.042-725-1155
henshu@sclpa.jp
東京本社：〒194-0022 東京都町田市森野1-34-10
大阪本社：〒552-0007 大阪府大阪市港区弁天1-2-2-300
http://www.koukouseishinbun.jp/

第２回　会長・事務局長研修会

ＰＴＡに期待すること

～家庭教育・地域の教育力を高めるために～

文部科学大臣補佐官　鈴木　寛　氏

（講演要旨）

本日は高校の最大のステークホルダーであるＰＴＡの皆様に我々が考えている背景について直接お話しさせていただけて、ありがたいことです。本日の話・議論を各地域・ＰＴＡに持ちかえり、ＰＴＡの関係者・地域の皆さんと共有していただきたいです。私共も各地域・各県の高Ｐ連にお招きいただければホンネの高大接続についてお話しする機会を設けたいと思っています。本日がそのきっかけとなれば幸いです。本日は文部科学省が進めている高等学校ならびにＰＴＡに関する施策の背景についてお話しします。先ほど会長より「文科省はどっちを向いているのか」と「自立・主体性」の話がありましたが、会長のお話は200％我々の考えていることをご理解いただき、同じ方向性を目指しているのだと感じました。

今はまさに卒近代、産業革命以来の激動の時代に入っています。激動の時代を仲間と協力しあいながら、自立的・主体的に生き抜いていく力をどう獲得してもらうかということで文科省はやってきました。

今、文科省と公立学校校長会が真剣に向き合った議論をしています。

まず言えることは、今まで高校がやってきたことは決して間違っていなかったということです。現場は素晴らしい、世界に誇れる教育をやってきました。ただ世の中が物凄い勢いで、日本でいえば150年ぶり、世界でいえば300年ぶり、想像を絶する勢いで変わっていることです。そのことに備えておかなければならないのです。いままでの教育を否定している訳ではありません。

未来に向けては、ハーバード大学ビジネススクールの経営学の大家・クリステンセン教授が「破壊的イノベーション」と言っています。

今は、破壊的イノベーションをしなければいけない歴史的ステージにあります。

昔はレコードがあり、その次にＣＤがあり、そして今は、アイフォーンなど携帯やスマホで音楽を聴く時代になりました。これは非連続な破壊的イノベーションです。要はレコード会社がさぼっていたわけではありません。レコード会社は質をあげるために頑張ってきました。ソニーとか日本の家電はカセットやウオークマン、ビデオなど素晴らしい製品を作ったわけです。クリステンセンは「真面目にやればやるほど、次の非連続なジャンプが遅れる」と言っています。典型的な日本の教育はクリステンセンの言う破壊的なイノベーションに乗り遅れつつあるパターンです。いまやレコードでもＣＤでもなく、まさにスマートホンの中に何十万曲も入っているというところにきています。この時代にどう対応しなければいけないかということです。

歴史の勢いとして黒電話が８～９割近く普及するのに80年かかっているが、スマホ（既に一億台を超えている）が普及するのに５年近くしかかかっていません。いままでは四世代かけて試行錯誤しながらやってきたことが、今の時代が怖いのは５年で世の中があっという間に一変してしまうことです。しかも「飛ばし」といって、アフリカではいきなり固定電話をとばして、携帯電話やスマホが入ってきています。日本は固定電話、携帯電話、スマホと順序よく入ってきています。だが怖いのは階段でいうと二段飛ばし、三段飛ばしでくると、こっち側は一歩一歩進んでいて、いままで更新したものをどう回収しようかということです。

本日はいかに今が激動かということを皆さんに感じ取ってもらいたい。この激動に対応するために今我々が行っている改革が必要だということをご理解いただきたいです。しかし着地は重要、そこを失敗すると骨折します。いい着地・スタートができるようにご意見いただきたいです。

さて、「なんで**高大接続**なのか」ということです。

小中学校もいじめ、不登校などいろいろな課題を抱えています。あるいは小中高を通じて自己肯定感の低さなども問題です。

しかし学力だけで申し上げれば我が国の15歳は２０１２年段階で世界一に復活しております。そして２０１５年のＰＩＳＡ調査でも数学理解については35か国ＯＥＣＤ加盟国中一番ですし、マスコミは読解力が６位になったといいますが同率３位だと考えてください。

今まで紙で行っていた試験を今回はコンピュータで行いました。しかも問題の出し方が、問１が終わらないと問２にいけないというようになっていまして、問４が一番難しい問題になっています。ちょっとやりにくくなっていました。オリンピック選手が、天候が悪いとか、サッカーの芝生との相性が良かったかのように、勝負には時の運とか地の利があります。銅メダルも６位も同じようなものです。日本のマスコミはメダル好きで金か銀か銅かとこだわりますが、そのような類のものではありません。６位や８位に入っていれば世界のトップ集団ということです。日本の15歳は学力の面では世界トップに戻ったということです。このようないニュースをメディアはほとんど報じてくれません。そのため、いまだに学生の卒論をみると「日本の学力低下問題は……」から入ります。いまは全ての項目で（かつて世界一だった）フィンランドを上回っています。

ただ、この学力世界一の15歳が高校に行ってまたは大学で花開いているだろうかを胸に手を当てて考えてみたとき、世界一の15歳の素質を十分に開花させているとはやや言い難い部分があるのではないかということです。そのために高校と大学に政策の焦点を絞ってやっているところです。ＯＥＣＤだけでなくテイムスの調査でも数学と理科については小４も中２も好パフォーマンスをあげています。よくシンガポールに負けているといわれますが人口５千万人を超える民主主義国において、日本は圧倒的にナンバーワンです。ご安心いただきたいと思います。

二十世紀の教育と二十一世紀の教育では90度くらい変わっています。我々日本の教育（高校教育を含めて）は１９８０年代くらいまでは世界一でした。これは誇っていいことです。１９９０年から20年くらい移行期の中でいろいろな混乱がありました。

１９８０年代くらいまでの特に、理数系の教育というのは大学を含めて本当に凄かったです。日本は今年もノーベル賞をとりました。ノーベル賞を毎年とっていることは素晴らしい限りですが、その出身校をみるともっと素晴らしいです。梶田先生は埼玉大学です。中村修二先生のご出身は徳島大学です。下村先生は長崎大学です。１９７０年代、１９８０年代のわが国の国立地方大学の水準はノーベル賞を十分に輩出する素晴らしいものでした。ただし、文系の大学教育にやや難はありましたが。

どの時代も前の時代で成功しますと慣性の力が働いてどうしても次の時代は遅れます。イギリスもドイツもどの国もそうです。日本もその慣性力をこえて新しいものをやらなければいけない時代の移行期にあります。20世紀は基本的には大量生産、大量流通、大量消費システムをどれだけしっかりと作り上げて、そしてどれだけ人工物をたくさん効率的、効果的に生産して、それを富として蓄積するかという競争でありました。１９８０年代には「ジャパンアズナンバーワン」という本も出ましたが、日本は大成功しました。日米貿易摩擦にもつながっています。

何故成功したのか、それはその工業社会を支える人材の育成に成功したからです。

それは、ベルトコンベアーの前に立って、マニュアルをしっかり覚えて、それを正確に、高速に再現する力を日本は徹底的に磨きました。その結果日本の工場の品質管理は今なお世界一です。驚異的な品質を出すことに成功しています。このことは素晴らしいことでキープしたらいいのですが、１９８０年代からコンピュータ・ＩＣＴが急速に普及してきました。そのことによって大量コピー力は人間の仕事ではなくなり、機械の仕事に急速に劇的に移行してきているということです。少なくとも日本ではお手本を正確にコピーする仕事はどんどん海外にもっていかれています。これが産業の空洞化です。地方はなお産業構造の転換が十分にできずにいます。

21世紀の社会はどうなるかということですが大量生産が行き過ぎて大量廃棄、大量のエネルギー消費、CO_2の排出など環境問題が深刻化しています。となると付加価値というものは人工物の大量生産から知的な創造や、社会の複雑ないろいろな難問を解決することにシフトしています。

本日お集まりいただいたＰＴＡの会長さんは、まさに社会、産業構造の激動の只中を生きている方々でありますから、是非、会長の皆さんの肌感覚をもっともっと教育現場にしっかりと伝えていただきたいのです。これをＰＴＡにお願いしたいのです。

どうしても学校現場・教育現場は慣性力が強く働きます。大学の中、高校の中だけにいますと、20世紀に確立した教員養成システムが養成した教員の肌感覚とのタイムラグが生じてしまっています。その部分をＰＴＡ会長の皆さんがこの世の中の変わりぶりの肌感覚を他のＰＴＡ会員、高校の現場、管理職、教育行政に発信してもらいたいのです。同時に他のＰＴＡの皆様にも現在の激動の時代を共有していただきたいのです。

さて、そうなりますと大量生産、定型支援作業はほとんどデジタルテクノロジーに取って代わられます。人間の仕事ではなくなります。

一方で人工知能、ロボット、バイオテクノロジー、インターネットが劇的に進歩します。インターネットにより24時間、人間が日常茶飯事的につながることが既にできていますが、機械同士がつながる時代が来ます。３Ｄプリンターの技術革新に象徴されるように、今では金型をつくらなくてもよい時代になりました。

そんな中で、２０４０年代半ばにはＡＩ（人工知能）が人間の知能を上回るのではないかと言われています。シンギュラリティ（技術的特異点）といっ

て、まさにＡＩが人間を超えてしまうのです。そうなったとき、オックスフォード大学のマイケルオズボーン准教授によると、今ある仕事の半分くらいがＡＩにとって代わられるのです。

例として、最近、「アルファ碁」といって囲碁のＡＩが韓国のチャンピオンに勝ちました。知的作業もＡＩにとって代わられてしまうのではないかといわれています。国立情報学研究所が「東ロボくん」という人工知能をつくりました。東大には合格していませんが私立大学のほとんどは合格してしまう、センター試験ではいい点をとってしまうという状況です。ＩＢＭの「ワトソンくん」という人工知能は三井住友銀行の入社試験に受かっています。

衝撃的ですが、野村総研とマイケルオズボーン氏が「なくなる仕事となくならない仕事」を100業種ずつ発表しています。失われる職業として鋳物工とか作業現場の仕事、行政事務員、銀行窓口係、経理事務員などがあがっています。自動運転が普及するとタクシードライバもＡＩにとってかわられるのではないかといわれています。

一方でしっかり残る仕事もあります。アートディレクター、医療ソーシャルワーカー、映画監督、音楽教室講師、教育カウンセラーなどです。ただし、ものづくりの仕事がなくなるわけではありません。いわゆる作業的な仕事はなくなりますが、工業デザイナーとか経営コンサルタントは残ります。または工場の生産ラインのどこが故障したか見つける仕事はＡＩだけではできません。ものづくりの製造業部分はなくなりますが、デザインや修理、人材育成などサービス産業の部分は残ります。

その中で会社の役員の皆さまの極めて大事な仕事は社員をどうやってエンカレッジするかということです。これはＡＩではだめです。学校でも、小学校教諭、中学校教諭、高校教諭、大学教員などは残ります。

知識を伝達するにはＡＩがいいです。たとえば生徒の「どこが弱くてどういう問題をやればよいか」などはＡＩにとってかわられます。しかし子供たちのモチベーション、自発する心をもたせるなどは人間がやらなければいけません。

人工知能が医師に代わって診断することが急速に進歩しています。おそらくこの５～６年以内にＡＩの診断によって今の平均的な医師の誤診率を下回るだろうといわれています。特に画像診断は急速に進んでいます。ただ、いくらＡＩに「この手術を〇〇％の確率で実施した方がよい」と言われても、納得できない、やはり大学病院の主任の教授が「手術しましょう」の一言がないと手術には踏み切れないものです。

特別の知識・スキルが求められない職業についてはＡＩにとって代わられます。秩序的・体系的操作が求められる職業については人工知能等で代替できる可能性が高いです。

一方で芸術、歴史学・考古学、哲学・神学など抽象的な概念を整理・創出する仕事、何が美しいか、何がかっこよいかを判断する仕事（デザイナー、ネイルアーティストなど）は人間の仕事として残ります。もう一つは他者との協調、他者の理解、説得、ネゴシエーション、サービス志向、いわゆる対人、ヒューマンサービスはＡＩの代替は難しいです。

２０４５年シンギュラリティに向けて、今回の学習指導要領と、高大接続改革を行っています。高等学校学習指導要領は全面的に改訂します。

40年続きました１９７９年に始まった共通一次試験、１９９０年に始まったセンター試験入試を２０２０年にやめます。そして**「大学入学希望者テスト」**に置き換えます。

なぜ今、**教育改革**なのかということです。２０２０年に高校生になる人たちはいつまで生きているのかということです。答えは２１００年まで生きています。特に女子高生はあと80年、男子高校生はあと70年生きます。今の高校生にとって２０４５年は人生の折り返し地点にも到達していません。

300年ぶりの激動の時代を生きていく子供たちの基礎基本・土台をつくってあげるのが学校教育であるということです。

厳しい言い方ですが、22世紀まで生き、22世紀をつくる児童生徒たちにこれまでの20世紀型の大量生産、暗記力と反復力、コピー力を身につける教育を行うということは、大量の失業者を養成し続けていることと同じであるという認識にたっていただきたい。このことを校長会の皆さまにシエアしてください。今までと同じことをやればやるほど失業者になるのです。これが破壊的イノベーションにおけるデイレンマです。

ではこれから２１００年までの激動の時代はどんな時代になるかということです。思いもよらないリスクと思いがけないチャンスとその両方があります。少し懸念していることがあります。

日本人は何でも不安をあおる傾向があり、半分の仕事がなくなるから大変だなどと、リスクばかりに注目します。しかしそれ以上にもっと付加価値の高い仕事が50％以上、いや場合によっては70％近く生まれます。

日本社会で主として育った若者がチャンスをものにし、リスクを避ける的確な判断力、人生設計をしてもらうため生き抜く力を作っていこうではないかということです。

一つだけ確実なことは今のままはだめだということです。不確実性が加速し、混迷の度合いが増します。科学技術は劇的に進歩します。しかしそれはいいことも悪いこともあります。社会的な便益とリスクの双方が増大します。できうるならリスクを回避

し便益を享受してほしいです。

もう一つ**グローバル化**はいやおうなく進みます。これから高校生を送り出す職場で、部下・同僚・上司・取引先で、オール日本人ということはありえません。その中で日本社会、日本文化、日本の常識と異なる常識を身につけた人たちと日常茶飯的につきあわなければならない状況がすぐそこまで来ています。

今、世界の教育の話題は移民・難民です。人間のモビリティーが一段と加速しています。教育問題は一気に国内問題から国際問題になりました。これからは、小学校、中学校、高等学校、大学と、同じ国の教育を受けるのではなく、複数の国で教育を受ける人が増えます。それぞれの国のバリエーションがありますが、人間として必ず教えなくてはならない共通価値があります。今一番困っていることはホームグローンテロリスト（自国で育ったテロリスト）です。9・11のときの犯人はアフガニスタンなどのアルカイダやタリバンなどに洗脳された狂信的なテロリストでした。昨年パリのテロリストはフランスで育ち、フランスの教育を受けてきました。フランスが自信をもって行っていた国民教育を受けた若者が自国民に対してテロをやったのです。問題は足元にあり、あの自信家のフランス人が自信を喪失しています。各国共通で命の大切さとか共生とか、差別してはいけないなどしっかり教えていかないとホームグローンテロリストは解決できないではないかということです。

グローバル化は複雑性、多様性、想定外というリスクを常に抱えています。会社などで欧米以外の国と契約するとき、常識が全く違います。思いいもよらないところで契約が壊れてしまったり、反故にされたりします。しかも相手は何の悪気ももっていません。このようなことがあらゆる現場で起こるのです。

矛盾（ディレンマ）、葛藤（コンフリクト）、トレードオフ（あちらを立てればこちらが立たず）の問題が増加し難問化します。常に板挟みにあう状態です。

激動の時代にあって、様々な板挟みと向き合って乗り越えることができる人材をどうやって育成するのかがこれからの教育のテーマになります。まさにそういう時代に自立できる人材を目指しています。

今回プロジェクトベースドラーニング（プロジェクトに基づく学習）あるいはプロブレムベーストラーニング（問題に基づく学習）といっていますが、実際の課題やプロジェクトとに基づく学びです。このような学びでは必ず板挟みになります。板挟みが学びの契機となります。要するに今までは板挟みを逃げてきましたが、板挟みは人間を成長させる好機です。むしろ積極的に「板ばさまれる」、そして傷つき折れたときに励ましてくれるセーフティーネット・母港が必要です。ヨットを修理しなおし、もう一回荒波に強風に戻し、送り出していくことを積み重ねることで多少の強風・荒波にへっちゃらなタフな自発力を持った、チームのメンバーと問題を解決していくような人材が育ちます。

なぜ教養教育が必要かというと、板挟みの中で苦闘した先人先哲たちの物語（第二次世界大戦・空襲、阪神淡路大震災、東日本大震災当時の高校生は大変な思いを乗り越えたことなど）を教えることで板挟みにあった若者たちが自分だけではないんだ、だから自分たちも乗り越えていけるんだという勇気をもらっていくのです。

もう一つのキーワードは**想定外**ということです。これは科学技術の進歩に伴う想定外、あるいは複雑性が増すことによる想定外です。

釜石の奇跡（釜石の小中学校では登校していた子供たちは全員無事だった。ただし学校欠席者は犠牲になった。登校していた中学生は自分たちを救ったのみならず小学生の手を引き、地域のお年寄りの手を引き、多くの命を救った）の源はどこにあったのか、２００４年から7年間進めていた「想定外を生き抜く力」と題した群馬大学の片田先生の防災教育でした。そのエッセンスは三つあります。「想定やマニュアルに頼りすぎない」「どんな時でも、ミスを恐れず、ベスト・最善を尽くす」「指示を待たずに、率先者になる」です。

20世紀の教育はともすると「マニュアルをしっかり覚える」「ミスをするな」「指示をまて」という教育をしてきたのではないでしょうか。

これからいろいろな想定外があるかもしれない。想定外（天災、経済、パンデミック）を生き抜く力が非常に重要になります。いろんなリスクもあります。ＯＥＣＤは政府や民主主義への不信もリスクといっています。トランプ政権の誕生によって国際政治の秩序が一日にして崩れました。一方で市民のボランティアをやる人とやらない人でどんどん差が広がっています。市民活動への不参加の問題、安全、テロの増加、移民難民の増大、ネット炎上など。そして家族問題もリスクです。ひとり親になるリスクを子供は日常茶飯的に抱えています。しかしその状況を受け止めざるをえない、そうなったときにどうするかです。

一方でそれだけ面白い人材に会えるチャンスもあります。イノベーションが激しく進展するのです。**アクティブラーニング**がキーワードになっていることはご存知だと思います。アクティブラーニングのもともとの趣旨は子どもたちを受け身人間から、脱受け身人間にして、高校生をどうやってアクティブ、主体的、自発的な学習者にしていくかということです。もちろんそうした中で話し合いの授業をやることがそうしたものを引き出す可能性は高いですがそれがすべてではありません。偉人の話の本を読む中でも「俺は頑張ろう」とアクティブになればそ

れがアクティブラーニングとなります。ありとあらゆる学びをどうやってアクティブラーナーにするために再構成するかということが大事です。日本人はどうしても型を重視してしまうので「アクティブラーニング型受け身教育」が蔓延してしまうことが大変心配です。日本の教員文化は大変真面目なので学習指導要領でアクティブラーニングというと「アクティブラーニング型押しつけ教育」に変わってしまうことを懸念しています。

本来目指しているのは子どもたちの目が輝くかどうかです。インプットは何でもいい、その子の状況に応じてＴＰＯをわきまえてまさに個別にいろいろなことを考える、その時の引き出しが多い方がいいのです。引き出しから何を出すかということです。そういう中で「想定外を生きる」「リスクに立ち向かう」「板挟みを乗り越える」。

我々が一番心配しており、松野大臣も最も力を入れていきたい問題が「生徒の自己肯定感、社会参加に関する意識の低さ」です。

「自分は価値ある人間だ」と思っている高校生が日本は４割、アメリカは８割、中国・韓国は86．７％、一方で「自分はダメな人間だ」と思っている高校生は日本は83．６％、アメリカは52．８％、中国39．１％、韓国31．９％、明らかに日本だけが特異な状況になっています。

あるいは「私の参加により社会は変えられるかもしれない」と思っている高校生は日本は３割、アメリカは７割です。自己肯定感、自分が社会を変えるという自己効力感を変えない限り、新しい時代を生きていけないのです。もちろん知識・スキルは大事ですがそれ以上に我々が問題視しているのはこの点です。まさに想定外や板挟みに向き合い乗り越えられる人材、ＡＩで解けない問題・課題・難題に向き合える人間、創造的協働的活動を創発しやり遂げる人材、このような人材をどうやって輩出していくのか、Ｇ７教育大臣会合でもこの問題、教育の目的をもう一回見直そうではないかと議論になってきています。

わが国では学力の３要素を学校教育法30条で決めています。「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性、学びに向かう力、人間性など」を既に定義しています。

小学校段階ではこの要素がバランスよくやられてきましたが、高校になるときわめて残念ながら知識・技能に偏った教育になっています。何故、高校の現場は学校教育法第30条を無視するのか、何故、言語活動や探究を重視する学習指導要領を無視するのか、文部科学省よりも法律よりも影響力の強いものがあるのです。それは**「大学入試」**です。

今回の改革は、高大、大学入試と大学の教育改革をセットで行うことによって、高校の現場をこの３つの要素がバランスのとれた学びに変えていこうとしたのです。

この流れはＯＥＣＤでも共有され、学力観を根本から再定義していこうとしています。注目してほしいのはAttitudes（態度）とValues（価値）が３つの柱の一つに入っています。これまで教育は知識とスキルを教えていればよかったのですが、より大事なことは態度とか価値、そしてその中に自己肯定感、好奇心、受容性、責任感、オープンマインド、成長する心、緊張やジレンマと向き合う、まさに板挟みに向き合う、逃げないということが含まれています。

このような背景により**学習指導要領を変えよう**としているのです。では何を具体的に変えるかということです。

今回の**学習指導要領改訂**のキーワードは小中高を通じてアクティブラーニングとなっています。これは主体的に多様な方と協働する、脱・指示待ち人間、難問から逃げない、むしろ難問をみたらチャンスと思う主体的な学習です。

小中学校については大きな変更はありません。ただし外国語活動が、小学校の科目追加になっています。高校は相当変えるつもりです。３要素のバランスをとりなおすために「歴史総合」という科目を入れます。近現代史からの世界史・日本史融合でやります。

これはずっと批判があって「縄文弥生からやるから第二次世界大戦以降が終わらないのではないか」とずっと言われてきました。この問題にいよいよ決着をつけます。これまで、歴史は典型的に暗記科目と言われてきましたが、暗記力ではなく、歴史的思考力を磨きます。歴史の専門用語も減らします。（３５００から２０００）ただし歴史を深く深く理解してもらいます。なぜなら歴史総合は歴史暗記力ではなく、歴史的思考力・判断力を身につけなければいけないのです。判断に耐えうるだけの歴史の文脈・背景付きで歴史的事実を深く理解するのです。知識の量は減りますが知識の質はタフになります。

それから学習指導要領の改訂は、ゆとりの再来といわれる方向違いの議論がありますが、全く違います。どういう知識を重要視するかというと「概念知識」を徹底的にやります。たとえば「力とはどういうことなのか」「光は波動なのか粒なのか」というようなものです。他に「地理総合」も入ります。それから公民に代えて「公共」、シチズンシップ教育にもつながりますが、この世の中の葛藤をどういうふうに解いていくかということをしっかり考えることをやっていきます。そして今回は「理数探求」という教科が新設されます。すでにスーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）が約200校弱の全国の学校で非常に大成功しています。これをもっと多くの学校に広げていきます。

訪問したある県の校長先生が、「校長・教頭はＳＳＨは素晴らしいと思っている。大学からの応援も

来て下さるし、生徒たちも面白くやっている。目の色がその時は変わっている。しかし職員会議にかけると教員はＳＳＨを返上しよう。ＳＳＨをやればやるほど偏差値が下がる」と言うのです。これを聞いたとき何が何でも「入試改革」をしなければならないと思いました。ＳＳＨが悪いのではなく、ＳＳＨの素晴らしい学びを職員会議のほとんどの先生が忌避するような入試が悪いのです。ＳＳＨを徹底してやった子供たちが安心してその希望する大学に選ばれ、その希望する学びを加速できる入試に変えていかなければならないというのが今回の私のモチベーションです。

高校のときからこうした探究活動をしっかり始めてもらおうということです。今どうなっているかというと、高校１年・２年生では探究活動を始めても、高３になったらそんなことやってないで受験勉強しなさいと言われます。せっかく蒔いた学びの意欲を全部消され、そして修行のような暗記道に入るわけです。これはこれで意味がないとは言いませんが、忍耐力とか理不尽・不条理に耐えるというようなことに全てのエネルギーをかけるというのはバランスを欠いています。むしろ高３になったらもっと探究活動を加速してそのままの勢いで大学に入るのです。時速０キロからはじめるのではなく、時速30キロで大学に入ってきてもらって大学に入って50キロ、70キロ、100キロとそれを加速するというような高大接続を実現します。社会科学も、社会探究も創ろうと思いましたがスーパーグローバルハイスクールは少し蓄積が足りないので、総合の時間を総合探究にして、世の中の社会事象に基づいた探究活動を入れていきます。それに加えて、ＩＴ時代の情報活用能力を養うという方向で学習指導要領の抜本改革を行っていこうということです。

その中でそのことの定着をみるために「高等学校基礎学力テスト」を導入してＰＤＣＡサイクルを回そうとしています。これは、報道では伝わっていませんが、基礎学力テストはＣ（チェック）の部分ですが、プランのＤＯの部分が大事でして、学習指導要領上、学び直しとか繰り返しの学びというものを今までは高等学校の補習・補講等でそれぞれカリキュラムの外でご苦労してもらっていましたが、これをしっかりとカリキュラムの中に入れて、とりわけ中学校３年生までの学び直し（たとえば数Ｉの前期まで）を正規の授業の中に位置づけようというものです。そうすれば高１残り半年しか残っていませんが、そのような子に数Ｉを残り半年で終わるというのは無理なことですから、であれば高２まで行ってしっかりと学び直しと繰り返しを入れる中で二年間かけて数学の内容を定着していくということです。学習指導要領の弾力的運用を正規なシステムとして追認していくことを考えています。

そしてもう一つＰＴＡ連合会の皆さまに共有していただきたいことは、我々は小学校中学校の義務教育の教員定数問題については、毎年大議論しています。おかげさまで今国会では抜本的な改革案が上がっています。きわめて大きな第一歩です。その傍らで高等学校教員定数の議論があまりにも少なすぎます。高校は義務と違って国庫補助ではなく、全部が地方交付税対象という理由はありますが、これだけのことをしっかりやっていこうと思えば、高等学校の教員の数と質の充実の議論は避けてとおれません。まさにこれがプランでありまして高等学校の教育力の教員の質、数の充実をプランしてもらおう、しかも総合教育会議になったわけですから知事もコミットしていただいたかたちでプランし、予算化してＤＯしていくことです。そのことが功を奏しているのかどうかチェックするために「高等学校基礎学力テスト」を回してＰＤＣＡをやるのです。

皆さんと議論を盛り上げていき、高校教員の定数問題、教育政策の中で高校教育を重要なアジェンダとして設定したいということです。

「大学入学希望者学力テスト」については思考・判断・表現ということで記述式を導入します。当初は100文字プラスマイナス20文字くらいの記述を国語と数学に導入していくということで昨年12月に決着しました。この方針は基本的に変わることはありません。マークシートは残します。ただし知識についても深い思考・判断を問います。マークシートにあってもそのような傾向で出します。

それと同時に国立大学の入学試験がかなり変わります。現段階で記述式を導入している国立大学は４割しかありません。１文字も文字を書かないで国立大学に入っている学生が６割もいるということです。これを今まで放置してきました。現行の学習指導要領は言語活動の充実と書いてあるにもかかわらず、大学入試に反映されていないことを余り問題視してきませんでした。これをちゃんと取り上げ、国立大学の場合は100％、少なくとも、ものを考えて書いた人たちに入ってきてもらいます。これは200文字から300文字くらいです。それから主体性・協働性を一発入試で問うことは不可能です。それを問うとしたら高校三年間の活動実績（理数探究・総合探究の活動、部活動、授業以外の様々な活動）を見なければなりません。その三年間の活動を評価するためには国立大学の定員の３割をＡＯまたは推薦にしていきます。すでにその動きは出ています。（東大・京大の推薦開始、東北大・名大はＡＯ推薦枠が15％位さらに３割へ、筑波大は既に３割推薦だが４割へ、その他阪大、九大など）その際、学習計画書、調査書、活動報告書を多面的、多角的につくっていきます。

ＰＴＡの皆さん、これからは高等学校の学びが変容します、たぶんびっくりします。今日、お話

しったことが背景にあって入試改革があります。２０２０年から本格導入ですが個別大学の入学試験については現行法でも学力の３要素が入っていますので、学習指導要領の変更を待たずして、今年からでも来年からでも逐次、この方向で加速的に変わっていくということでご理解いただければと思います。

私立大学については暗記力入試の代表と言われていた早稲田大学においても今回大きく方針転換をされています。昨年度の法学部・政経学部の入試傾向が大きく非連続に変わっています。今後加速されます。現在、早稲田は11万人に対し、慶応は４万人しか受けていません。慶応大は論述や数学を出すために受験生に敬遠されていました。今後はみんなが変わっていくことにより私学も記述式が定着していくであろうと思います。私学希望者もセンターが始める大学入学希望者学力テストを受けますから深い判断力・思考力を問うための記述式が定着していくでしょう。そして三年間の活動をみていくことになるでしょう。

さて、小学校中学校においては相当ＰＴＡと学校との関係が変わりまして、まさに地域と共につくっていく学校ということでコミュニティースクール（今も３０００校くらいありますが）の設置が全校努力目標になります。**地域学校協働本部**の設立など、ＰＴＡに新しい１ページを開くような改革が行われています。このこともご理解ください。

人工知能やロボット等による代替可能性が低い100種の職業

- アートディレクター
- アウトドアインストラクター
- アナウンサー
- アロマセラピスト
- 犬訓練士
- 医療ソーシャルワーカー
- インテリアコーディネーター
- インテリアデザイナー
- 映画カメラマン
- 映画監督
- エコノミスト
- 音楽教室講師
- 学芸員
- 学校カウンセラー
- 観光バスガイド
- 教育カウンセラー
- クラシック演奏家
- グラフィックデザイナー
- ケアマネージャー
- 経営コンサルタント
- 芸能マネージャー
- ゲームクリエーター
- 外科医
- 言語聴覚士
- 工業デザイナー
- 広告ディレクター
- 国際協力専門家
- コピーライター
- 作業療法士
- 作詞家
- 作曲家
- 雑誌編集者
- 産業カウンセラー
- 産婦人科医
- 歯科医師
- 児童厚生員
- シナリオライター
- 社会学研究者
- 社会教育主事
- 社会福祉施設介護職員
- 社会福祉施設指導員
- 獣医師
- 柔道整復師
- ジュエリーデザイナー
- 小学校教員
- 商業カメラマン
- 小児科医
- 商品開発部員
- 助産師
- 心理学研究者
- 人類学者

- スタイリスト
- スポーツインストラクター
- スポーツライター
- 声楽家
- 精神科医
- ソムリエ
- 大学・短期大学教員
- 中学校教員
- 中小企業診断士
- ツアーコンダクター
- ディスクジョッキー
- ディスプレイデザイナー
- デスク
- テレビカメラマン
- テレビタレント
- 図書編集者
- 内科医
- 日本語教師
- ネイル・アーティスト
- バーテンダー
- 俳優
- はり師・きゅう師
- 美容師
- 評論家
- ファッションデザイナー
- フードコーディネーター
- 舞台演出家
- 舞台美術家
- フラワーデザイナー
- フリーライター
- プロデューサー
- ペンション経営者
- 保育士
- 放送記者
- 放送ディレクター
- 報道カメラマン
- 法務教官
- マーケティング・リサーチャー
- マンガ家
- ミュージシャン
- メイクアップアーティスト
- 盲・ろう・養護学校教員
- 幼稚園教員
- 理学療法士
- 料理研究家
- 旅行会社カウンター係
- レコードプロデューサー
- レストラン支配人
- 録音エンジニア

人工知能やロボット等による代替可能性が高い100種の職業

- IC生産オペレーター
- 一般事務員
- 鋳物工
- 医療事務員
- 受付係
- AV・通信機器組立・修理工
- 駅務員
- NC研削盤工
- NC旋盤工
- 会計監査係員
- 加工紙製造工
- 貸付係事務員
- 学校事務員
- カメラ組立工
- 機械木工
- 寄宿舎・寮・マンション管理人
- CADオペレーター
- 給食調理人
- 教育・研修事務員
- 行政事務員（国）
- 行政事務員（県市町村）
- 銀行窓口係
- 金属加工・金属製品検査工
- 金属研磨工
- 金属材料製造検査工
- 金属熱処理工
- 金属プレス工
- クリーニング取次店員
- 計器組立工
- 警備員
- 経理事務員
- 検収・検品係員
- 検針員
- 建設作業員
- ゴム製品成形工（タイヤ成形を除く）
- こん包工
- サッシ工
- 産業廃棄物収集運搬作業員
- 紙器製造工
- 自動車組立工
- 自動車塗装工
- 出荷・発送係員
- じんかい収集作業員
- 人事係事務員
- 新聞配達員
- 診療情報管理士
- 水産ねり製品製造工
- スーパー店員
- 生産現場事務員
- 製パン工
- 製粉工

- 製本作業員
- 清涼飲料ルートセールス員
- 石油精製オペレーター
- セメント生産オペレーター
- 繊維製品検査工
- 倉庫作業員
- 惣菜製造工
- 測量士
- 宝くじ販売人
- タクシー運転者
- 宅配便配達員
- 鍛造工
- 駐車場管理人
- 通関士
- 通信販売受付事務員
- 積卸作業員
- データ入力係
- 電気通信技術者
- 電算写植オペレーター
- 電子計算機保守員（IT保守員）
- 電子部品製造工
- 電車運転士
- 道路パトロール隊員
- 日用品修理ショップ店員
- バイク便配達員
- 発電員
- 非破壊検査員
- ビル施設管理技術者
- ビル清掃員
- 物品購買事務員
- プラスチック製品成形工
- プロセス製版オペレーター
- ボイラーオペレーター
- 貿易事務員
- 包装作業員
- 保管・管理係員
- 保険事務員
- ホテル客室係
- マシニングセンター・オペレーター
- ミシン縫製工
- めっき工
- めん類製造工
- 郵便外務員
- 郵便事務員
- 有料道路料金収受員
- レジ係
- 列車清掃員
- レンタカー営業所員
- 路線バス運転者

鈴木寛氏講演資料より

子どもの貧困に向き合う

第１回　会長・事務局長研修会
子どもの貧困　～現状と課題～

大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類　教授
スクールソーシャルワーク評価支援研究所　所長
山野則子氏

「日本の子供の六分の一が貧困であり、貧困の状況は次世代に連鎖する」

山野教授のご講演は、貧困の状況を知り、ＰＴＡとして何ができるか考える機会となりました。

～川崎事件から考える～

事件の背景に貧困問題がある。被害者はひとり親家庭、島根県から神奈川県川崎市に転入して間もなかった。家庭は生活保護を申請中であった。加害者たちの多くは高校を中退している。出口を支えていくことも大切である。この事件後、多くの人が自分たちはもっと何かできたのではないかと考えている。

非行・不登校は学校の問題だが、貧困は福祉の問題と思っていないか、自分は関係ないと当事者も思っている。専門家が入れば解決するというわけではない。解決する仕組みが必要である。それぞれの立場でできることはある。

～子どもの貧困とは～

・物的資源の欠如、ソーシャルキャピタルの欠如、ヒューマンキャピタルの欠如があげられる。

・日本人は貧困に対して厳しい。勉強机や自転車を持つことは子どもにとっては絶対必要なこと、贅沢ではない。（高校生ではスマホも）

・実態例として、ある自治体（都道府県）では生活保護率６％、就学援助率約25～30％、母子家庭率・義務教育年で平均約30％のところもある。

・「貧困家庭の子」の高校進学率はやや低く、中退率は高い。

「見えない！貧困」により支援が届かない実態がある。学校から見える姿は、遅刻が多い、不登校、怠学等くらいである。

学力は社会の問題、貧困問題に起因する

・努力（学習時間）と学力の関係において、貧困家庭の児童生徒が「３時間以上」勉強して獲得する学力の平均値はお金持ちの「全く勉強しない」児童生徒の学力の平均値よりも低い。

「がんばれ」「やればできる」という問題ではない。

・家庭における読書活動が子どもの学力に最も強い影響を及ぼすが、貧困家庭には本がない、読書の生活習慣もない。

・子どもたちの置かれた環境、格差が子どもの将来に影響する

貧困家庭への支援方法

親子で将来の夢をディスカッションできる家庭へ、子どもに選択肢を拡げることとモデルを示すこと、親を勇気づけることが重要である。

～報道される居住不明児童は「虐待」であり、多くは「貧困」である～

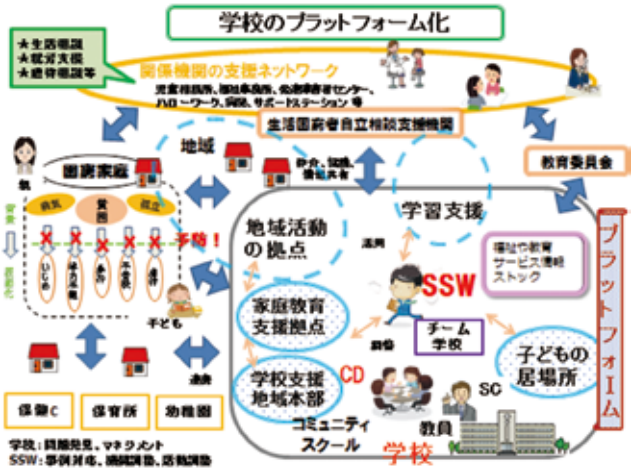
・子育て層全体の３分の１が孤立、貧困層である。それが児童虐待につながっている。孤立・不安が問題行動へそして学力低下へとなっていく。

～仕組みから考え直す必要がある～

学校が困っている

日本の初等中等教育学校は教員以外の専門スタッフが少ない。（日本18％、イギリス49％）イギリスではしんどい学校ほど教員以外のスタッフが入っている。（学校で、あるいはチャイルドケアセンターと共同して母親への就労支援など）

貧困対策では早期教育の導入による格差是正が必要。



学校をこれ以上忙しくさせてはいけない。子どもや親にとって学校が一番行きやすいところ・学校をプラットホーム化する。

（講演まとめ　常務理事　内田志づ子）

子供の未来応援国民運動

https://www.kodomohinkon.go.jp/

全国高等学校ＰＴＡ連合会では子供の貧困をなくすため、社会全体で支援の輪を広げていくために、政府（内閣府、文部科学省、厚生労働省）、地方公共団体、経済界・労働組合、マスコミ、支援団体とともに、「子供の未来応援国民運動」に参加しています。

個人でもすぐできる具体的な支援方法はＨＰをご覧ください。

全国高等学校ＰＴＡ連合会賠償責任補償制度のお知らせ

あなたの学校も加入しませんか？全国高Ｐ連加盟高校の２校に１校が加入しています。

掛　金　生徒１名あたり**年間400円**(保険料391円＋制度維持費９円)
※補償開始日が平成29年４月１日の場合。補償期間中の加入については、月ごとに掛け金が減額となります。

補償期間　平成29年４月１日～平成30年３月31日

補償の範囲と支払済高額事故事例　＜生徒もしくはＰＴＡに過失があった場合が対象となります＞

補償の範囲	補償限度額		事故発生件数割合
１．生徒の行為に起因する賠償責任 (生徒個人の賠償責任)	対人・対物合算(注) **１事故１億円**　自己負担額１事故５千円 (注)対人事故・対物事故合算して１億円が限度となります。		**99%超**
２．ＰＴＡ活動の遂行に起因する賠償責任 (ＰＴＡの賠償責任)	対　人	１名５千万円・１事故５億円	**1%未満**
	対　物	１事故５千万円	
	自己負担額１事故１千円 (注)対人事故・対物事故それぞれに適用されます。		
	保管物	加害者１名　10万円 保険期間中　500万円 自己負担額１事故５千円	

年度	支払金額(千円)	事　故　内　容
19年度	87,915	無灯火の自転車で歩道を走行中、後ろから人に追突し転倒させ、脳挫傷により要介護状態となり、死亡させた。**【過去最高支払金額】**
24年度	40,206	自転車で歩行者と衝突し、脳挫傷を負わせ、死亡させた。
24年度	20,040	ゴルフの練習中にゴルフクラブが友人の左目にあたり失明。
26年度	23,602	自転車で歩行者に後ろから衝突し、脳挫傷を負わせ、死亡させた。

☆上記のとおり自転車による人身事故が高額支払いになる傾向にありますが、自転車事故に限らず国内における事故を24時間、幅広く補償しております☆

詳しくは、「全国高Ｐ連賠償責任補償制度」手引き・チラシをご覧ください。
(各学校へ１月下旬にお送りしています。)

●制度についてのお問い合わせ窓口

一般社団法人全国高等学校ＰＴＡ連合会
東京都千代田区神田佐久間町２－１奥田ビル301号
ＴＥＬ．03－5835－5711

●引受保険会社

引受幹事保険会社	東京海上日動火災保険株式会社 (担当：公務第二部　文教公務室)	ＴＥＬ．03－3515－4133
共同引受保険会社	ＡＩＵ損害保険株式会社	ＴＥＬ．03－6848－8480
	三井住友海上火災保険株式会社	ＴＥＬ．03－3259－4061
	損保ジャパン日本興亜株式会社	ＴＥＬ．03－3349－9588

富士山と茶畑

『有徳の人』づくり

～未来のために行動する「一人」を育てよう～

第67回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会

静岡大会のご案内

メイン会場　エコパアリーナ

写真提供：エコパ

第67回全国高等学校ＰＴＡ連合会大会静岡大会は、平成29年８月24日（木）・25日（金）の２日間、静岡県小笠山総合運動公園エコパ内のエコパアリーナをメイン会場に開催します。

会員の皆さまに心のこもったおもてなしをしようと、密度の濃い議論を重ねながら計画を練り準備を進めています。

直に、静岡の風土に触れ、山海の美味に舌鼓をしながら『有徳の人』づくり」についてご一緒に議論しようではありませんか。

大会趣旨

静岡県はいま「『有徳（ゆうとく）の人』づくり」をすすめています。

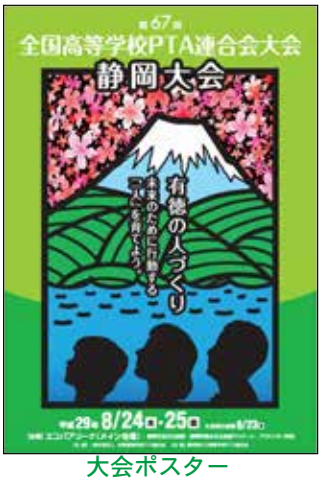
有徳の人とは、個人として自立した人、人との関わり合いを大切にする人、より良い社会づくりに参画し、行動する人を意味します。

少子高齢化、経済のグローバル化、情報社会の進展など、いま日本は大きな変革の時代を迎えています。同時に、フリーターやニートの増加、地域産業の空洞化、経済格差の拡大、情報モラルの低下など、様々な課題も抱えています。

このような時代にあって求められるのは、地域の、日本の未来のために行動する「徳」を備えた人材ではないでしょうか。そんな「有徳の人」を育てるために、子どもたちが高い志をもって学び、未来を切りひらく力を養うことができる環境を整えていくことが、私たちＰＴＡの使命であり、また社会の責務であると考えます。

このような思いから、第67回静岡大会はメインテーマを『有徳の人』づくり」としました。そして、サブテーマを「未来のために行動する『一人』を育てよう」としました。

有徳の人。それはたとえるなら、独立して頂き高く美しくそびえ、社会のなかに豊かなすそ野を広げていく、「富士山」のような人。誰もが憧れてやまない世界文化遺産「富士山」に見守られながら、静岡大会をとおしてお互いに学び合い、交流し合い、語り合いながら、会員同士の絆を深めていきましょう。



大会ポスター

静岡大会カラー
“静岡新茶もえぎ色”

静岡大会 Web ページのご案内
静岡県公立高等学校ＨＰトップページのバナーをお開きください。静岡大会概要をご覧いただけます。
http://www.hs-pta-shizuoka.net/pta_shiz2017/index.html

大会シンボルマーク

◇大会ポスター
静岡県立伊東高等学校城ヶ崎分校　楠元　璃子　さん

世界文化遺産である富士山と静岡県の原風景であるお茶畑、咲き誇る県花ツツジを背景に、波の中に輝ける未来を見つめる親子のシルエットを配しました。そして、大洋の波は力強い父親、美しく咲く花は明るい母親をイメージしました。

◇大会シンボルマーク
静岡県立御殿場高等学校　北元　杜果　さん

静岡県特産物のミカンやお茶、出荷額日本一のピアノ、県の鳥サンコウチョウや県の花ツツジを盛り込み、全体が円くなるように配しました。また、サンコウチョウが世界文化遺産の富士山やふじの国の眼下に広がる大海を眺めているよう構成しました。

８月23日（水）　前日会議・レセプション
分科会別運営会議・リハーサル：各分科会会場
諸会議・レセプション：ホテルセンチュリー静岡

時　間	行　事
13:00～13:40	分科会別運営会議
13:55～15:20	分科会リハーサル
16:40～17:40	大会運営会議
18:00～20:00	全国事務局長会議 レセプション

８月24日（木）　大会第１日・午前
開会式・表彰式、基調講演：エコパアリーナ

時　間	行　事
8:30～	受　付
9:00～9:30	アトラクション
9:40～10:40	開会式
10:50～12:00	基調講演（小和田哲男氏）
12:10～12:50	昼食
12:15～12:45	アトラクション

８月24日（木）　大会第１日・午後
分科会

時　間	分科会名	会　場
袋井会場 14:00～16:30	全国高Ｐ連研究発表	小笠山総合運動公園エコパ
	第１分科会	アクトシティ浜松
静岡・清水・浜松会場 15:00～17:30	第２分科会	静岡市清水文化会館マリナート
	第３分科会	静岡市民文化会館
	第４分科会	小笠山総合運動公園エコパ
	特別第１分科会	静岡市民文化会館
	特別第２分科会	アクトシティ浜松

８月25日（金）　大会第２日・午前
記念講演、分科会報告、閉会式：エコパアリーナ

時　間	行　事
8:30～	受付（アリーナ前）
9:00～9:30	高校生アトラクション
9:40～10:50	記念講演（筧　利夫　氏）
11:00～11:20	分科会報告
11:20～12:00	閉会式

静岡でお待ちしています！

（注）地域の特性上、各会場へのアクセスは公共交通機関（ＪＲ）の運行本数・乗車可能人数が少ないため、移動には有料シャトルバス（事前予約制）のご利用をお勧めします。

静岡Ｂ級グルメ新御三家（左から、浜松ぎょうざ・静岡おでん・富士宮やきそば）

写真提供：
静岡県観光協会

VEGETABLE OIL INK
リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。